

幕末人物体系其の壱 “楠田行展”

「豪氣人を凌ぎ、最も議論に長じ、且つ学を好む。しかれども己に勝つ者を喜ばず」と友人に評された人物が越後長岡藩に存在した。反骨心の塊、河井継之助(かわい つぎのすけ)。新潟県長岡市は戊辰の戦地の中でも3ヶ月間にも渡った北越戦争の舞台。長岡藩は何を求めて戦ったのか。今回は当時藩の家老だった河井の経緯から長岡藩の歴史を振り返ります。

彼は中級藩士、河井代右衛門の長男として文政10(1827)年1月1日に生まれ、長岡藩11代目藩主、牧野忠恭(ただゆき)に仕えます。31歳、安政5(1858)年遊学の旅に出る。備中松山藩(現岡山県高梁市)の改革者、山田方谷(ほうこく)を訪ね、特産物の貿易と倭約での成功を学びます。元治元(1864)年、江戸勤めの際、幕府老中だった牧野忠恭に、金ばかり掛かる老中を辞めよう進言。彼の意気に動かされた忠恭は「委細は河井に任せたり」と聞き入れ、河井を家老に昇進させた。米を藩専売にし、長岡から新潟にかかる信濃川の通行料を廃止し流通経済の活性化で、藩財政を建て直します。しかし、その頃幕府は第二次長州征討に破れ、権力を失墜させます。慶応4(1868)年1月3日鳥羽・伏見の戦い。将軍、徳川慶喜は謹慎。新政府軍は目標を会津藩と定め、東北に向け進軍開始。その頃河井は江戸の長岡藩邸の美術品、茶器を換金し、横浜で近代兵器を購入しています。機関「ガトリング」砲2門、小銃2千挺を藩軍に導入しました。戦乱に対し武装することで藩の「自立」を考えたのです。小千谷に進軍した新政府は長岡に対し、会津征討の兵、軍資金を要求します。一方会津も同盟を結び対新政府の共同戦線を張りたいと要求。薩摩72万8千石、長州36万石、対する会津23万石。長岡は僅か7万4千石。薩長と会津の戦乱に巻き込まれれば小国長岡が無事の筈がなく、中立国であると宣言したのです。5月、河井は慈眼寺で新政府、岩村清一郎と交渉。「今、新政府が長岡に軍を進めれば、戦乱を招くだけだ。我々は薩長にも会津にも付かず中立である」と。「会津にも恭順を促すので時間をくれ」。嘆願書持参の交渉でした。しかし交渉は30分で決裂。「戦争準備の単なる時間稼ぎだ」と切り捨てられる。これよりは「戦場で相まみえるのみ」。岩村は河井の再三の要求にも応じなかった。

中立の夢はここに破れ、藩の自立を賭け「北越戦争」が始まります。5月10日、長岡より南、榎峠奪取、13日朝日山でも勝利。長州奇兵隊を敗退させる。反撃する新政府は19日早朝北上し長岡城を奇襲。ガトリング砲で河井自ら応戦するも落城。敗走した栃尾で再起を図る。敵の集中する今町(現見附市)に照準を定め、6月2日牽制隊と本隊の挟撃で、今町占領。7月24日、八町沖という南北5kmの沼地帯を深夜渡る。25日未明に上陸し一機に城を目指す。新政府軍の虚を突き、敗走させ長岡城奪還に成功します。新政府は長岡の苦戦に対し、大量増員し、新潟港に上陸。長岡を目指し南下。また、長岡以南の兵を北上させることで挟撃を図る。城を守る戦いの中、河井は足を打ちぬかれ戦線離脱。総指揮官を失った上、少ない兵力の長岡は次第に押し寄せ、遂に29日、城は再度陥落した。河井らは、再起の為、同盟国会津を目指し長岡会津の藩境「八十里越」を経る。傷が元の破傷風で高熱にうなされながらも河井は「八十里。腰抜け武士の越す峠」と自嘲の句を詠んだ。彼は会津領塩沢村(現福島県只見町)で覚悟を決める。8月12日従者に自分の棺を作らせた。そして16日河井は亡くなる。享年42歳でした。

あくまで長岡藩の「自立」の為に戦った河井。藩政改革にしる、北越戦争にしる、生涯のキーワードは「藩」に他ならなかった。自分が生きる藩の為に自分を生かす。藩の自立という目標に対する執念。小国長岡が反骨心で歴史と切り結ぶ。この姿は、ボクにとり、誠に励みになる。(楠田行展)

introducing our crew “mackiart”

初めましての人も初めましてじゃない人も、こんにちは。mackiart(本名:渡辺真紀)と申します。名古屋でPLAY+Channelという音楽を軸にしたアフタヌーンパーティーのオーガナイズをしています。

私の人となりや音楽以外からも知ってもらいたいきっかけになると思い、恥ずかしながらフリベ書かせていただきます。

私は旅が大好きで、時間とお金があれば毎年国内国外飛び回っています。旅行先は基本的に若いうちにしか行けない場所。例えば沖縄だと最南端の波照間島、南米のペルーなど。ペルーは飛行時間25時間強という前代未聞のロングフライトに身体がカチカチになりましたし、波照間島は石垣島から船で渡ったんですが、荒波に2時間もまれながら船酔いと戦うどちらも過酷な移動でした。そんな私の旅先での楽しみはずばり“食べ物”。その土地が一番身近に感じられる瞬間だと思うからなんです。

私は旅行先であまりガイドブックに載っているレストランなどには入りません。基本的には口コミに頼るので、情報は現地調達します。(時には直感も頼りますがこれは五分五分の結果に終わることが多いです。)その方がよりその土地の人の馴染みある食文化に触れることができますし、話かけることでコミュニケーションもはかれるので一石二鳥！ 国外に問わずこれは国内でも使える技だと思うので是非ともお試しあれ！ せっかくなのでそんな私が現地調達した食べ物の中で、特に印象に残っているものを紹介しますね。

一つ目は「ゲンゴロウ?の唐揚げ」これはタイの屋台で隣の席に座っていた人にももらいましたが、あまりにもリアルでひとかじりで断念。味は香ばしかった? 感じでした。二つ目は「焼きテビチ」波照間島で出会ったおっちゃん歓迎の意味をこめて手作りしてくれた豚の豚足を焼いたもの。これは最高に泡盛がすすみましたし、これをきっかけに今でも連絡を取っています。

こうやって思い返してみると、旅の思い出は食べ物から甦ってくる人が多いみたいです。ここで書いているうちにまたどこかへ行きたくなってきました。次に行きたい国は決めているんです。それは。。。カレーの国「インド」やっぱり理由は特にありませんが、知合いで行ったことある人としてもハマっていました。

この文章を読んだ方で旅行好きの方いらっしゃいましたら声かけてください。お酒片手に語りましょう。インドなんか詳しくなったら尚嬉しいです。

information

入口で実施しているフリマよろしくです。安くしますよ。次回のcollectiveは、2009年の夏を予定しています。詳細はホームページにてご確認ください。

http://www.geocities.jp/collective_web/

press collective

尾崎放哉の自由律俳句をかじってみて “yu”

私は普段あまり本を読むことをしないのですが、フィット感を確かめ、気に入るとスナック菓子をつまむように、気が向いた時にばらばらとページをめくっては小休止するタイプです。要は読書のために時間を割くという考えがハナからないわけです。そんな私にちょうどいいのは、短い読み物となってきます。今回紹介する尾崎放哉は、ショート文学の極めつけ(という個人的解釈)である自由律俳句の鬼才と言われている人で、私の姉が尊敬する劇作家で小説家でもある宮沢章夫さんの「牛への道」というエッセイを読んだことが私にとっての出会いとなっています。この作品の中盤あたりには、作者が読んだ珍書を紹介する書評の部があり、そこで尾崎放哉の全句集が紹介されており、中学校の国語の教科書に載っているほど有名な「咳をしても一人」はもちろん、「犬よちぎれる程尾をふつてくれる」などがそこでは、抜き書きされていました。その時は一見して半笑いの味わいを利かせる俳人だと単純に思っていました、いざ自分で全句集を買ってばらばらと読み進めると淋しさをまといながらも美しい情景としみじみと心浸るものがいくつもあることに気づき、おこがましくも自由律俳句の楽しみ方を自分でつかみつつあるので、気に入った句を挙げてみたいと思います。以下に示す句は、やんわりと無限大に広がっていく寂寥感が放哉の句の身上だと、ざっくり評することができます。

「たつた一人になりきって夕空」

「こんなよい月を一人で見て寝る」

「笑へば泣くやうに見える顔よりほかなかつた」

「たばこが消えて居る淋しさをなげすてる」

などが個人的にストライクでしたが、

「うそをついたやうな昼の月がある」

「島の女のはだしにはだしでよりそう」

「柘榴(ざくろ)が口あけたたはけた恋だ」

対照的に、どこかあたたかく、救われる気さえする味わいが深い句もあり、詠んだ瞬間の放哉の姿を想像するとなんだかニヤニヤしてしまいます。

「淋しいぞ一人五本のゆびを開いて見る」

淋しいという言葉が使われながらも、不思議とほっこりとさせられてしまうのは私だけでしょうか。たぶん「ぞ」がいけないんだな。「ぞ」が。こうなってくると、数年前NHKでふかわりょうがパーソナリティーをやっていた「眠れない夜はケータイ短歌」のノリに近いとすら思われます。やはりこういう簡単な言葉の深みを楽しむことができる点、尾崎放哉は現代っ子向きだと言えましよう。こんな解釈では筋金入りの自由律俳句ファンに烈火のごとく怒られたそうですが、私は決して多趣味な人間ではありませんが、生活の中で新たな楽しみを見つけることが人生のうまみなのだなあと放哉の句に目を通してつくづく思うのでした。そして精神的にヘルシーであればどんなものにも後からいくらかでも価値は付与されるもんだと思ひながら、拒まず、力まず気楽に構えて生活しています。

極私的ハウス噺 ageHaの巻 “itaru wakui”

毎度おなじみのこの駄文、なにを書こうかと毎度毎度アレコレ思案するのですが、近頃の私は家であまり音楽を聴いておらず、ますますこの駄文に書くべきネタを見つけるのに困るようになっております。という言い訳みたいな前置きはこのぐらいにして、今回は昨秋に行った東京・新木場のageHaというクラブのことを書こうかと思ひます。新木場と聞いて「え!? ソレどこ?」ってかんじだと思います。それもそのはず。東京とはいえ千葉に近いところで、ディズニーランドの近くです。

その日はたまたま東京にいたので友達に連絡するとNYからJuior VasquezというDJがやってくるのでageHaに遊びにいくとのこと。前々から一度ageHaを実体験してみたいと思っていたこともあり、「一緒に行くわ」ということで友人とageHaにむかっただけであります。

Juior VasquezというDJはかつて90年代半ばにNYハード・ハウスのトップDJとしてたいへんな人気を誇ったDJで、当時NYに遊びに行った友達は軒並みそのDJの虜になり、いまでも来日となると熱心に駆けつけているのです。私の友達に限らず日本中から当時Juior Vasquezにハマった人がこの日もたくさん集まっていたのだと思います。

かくいう私自身はNYに行ったこともなく、音楽的にもハード・ハウスにハマることはなかったのですが、この日のDJもそれほどグッとくるものではなかったのですが…。とはいえそこは大パコ。メインフロア以外にもいくつもフロアがあり、ウロウロしてみるのなかなか楽しいものです。

このageHa、とにかく巨大だということは聞いていたのですが、実際行ってみるとホントに驚きのデカさで、メインのダンスフロアはまるで体育館のごとき広さ。なおかつ天井も高く、それなりの人の入りにもかかわらず広々としていました。音の良さもこれまでに体験したことのないもので、メインフロアのどまんなかには大黒柱のようにウーハーがデーンと構え、フロアの周囲は天上からぐるりとスピーカーが張り巡らされ、まさに音に囲まれる環境。さらに驚いたことに、隣りの人と喋るときには普通にクラブで会話する時のように声を囁らすほどに叫ばずとも会話ができてしまうのです。これはホント圧巻でした。

このメインフロア以外にもバースペース脇にワンフロア。メインフロアを抜けた外にはテントを張ったフロアと軽食を売るテントがあり、さらにいくとプールがあって、そこはプールサイドフロアとなっていました。プールサイドはこの日がシーズン最後のオープン(冬場は寒いから使わないらしい)ということもあり、かなりの盛況でした。押し合いでプールに落ちるんじゃないかと心配させるくらいのダンスフロアの広さではあるものの、風を感じ月明かりや日の出を浴びながら音楽に身体をゆだねるのは気持ちのいいもので、DJはDAISHI DANCEという人だったと記憶しておりますが、キレイ目のハウスでメインフロアに負けない盛り上がりを見せておりました。

それにしても各フロアそれぞれの客層がまったくことなり、目的のフロア・DJ以外には目もくれないという感じではっきりと客層が分かれている雰囲気は意外なことでした。しかも入り口では持ち物検査とボディチェックはされるし、背中にでかでかど「security」の文字をプリントし懐中電灯を片手にした大量のマッシュョな警備員がウロウロしていて踊っていても視界に入るのはまことに興醒めでした。

しかしながら迫力の広さや音はなかなか文章で伝わるものでもないのですが、機会があれば遊びに行ってみてはいいかがでしょう。なお身分証明書をお忘れなく。というわけで毎度おなじみのこの駄文、「東京見聞録」でな具合でお茶を濁してまいりましたが、今回はこの辺りで筆をおかせてもらいます。悪しからず。

名プロデューサーCraig Streetについて “tawaki”

collectiveに集う耳の良いミュージック・ラバーなら、お気に入りのプロデューサーの一人や二人はきついていると思います。かくいう私も「プロデューサー買い」をよくする人間でして、裏方仕事をリスペクトするタイプです。HIP HOPなら、やはりPete Rock, DJ Premiereははずせません。あと、Beatminerzのドープネスには度肝を抜かれたものです。あまり有名ではないですが、Shawn J Periodも隠れた名プロデューサーですね。R&Bなら、往年のJam & LewisやTeddy Rileyは常に3割以上の打率を残す名プロデューサーだったことは誰もが認めるところでしょう。UKレゲエなら、MAD教授とデニス・ヴォーヴェルはマストです。

こんな感じでお気に入りプロデューサーは、あまた存在するわけですが、今回紹介するのは、ダンス・ミュージックとは距離のあるプロデューサーのCraig Street。もともとCraig Streetの存在を知っていたというわけではなく、僕自身がひどく感銘を受けた作品の共通性を探っていくうちに、その存在に気付いたといういきさつがあります。

Craig Streetが手掛けた最も有名な作品は、間違いなくNorah Jonesの1stアルバム‘come away with me’(2002)でしょう。初めてこの作品を聴いた時、懐かしさを覚えると同時に、これまでに聴いたことのない新しさを強く感じ、すっかり魅了されたものです。当初はNorah Jonesの才能のなせるわざだと思っていたのですが、実のところプロデューサーのCraig Streetの果たした役割が甚大だったということに気付かされた作品に出合いました。それがCassandra Wilsonの‘belly of thsun’(2002)。この頃のCassandraは、「ブルー・ジャズ・カフ・モダン」という比類なきスタイルを確立しており、ジャズ・シンガーという狭い枠を越境したアーティストであることをリスナーに強く印象付けました。どうしてもCassandra自身に評価が集ましがちですが、ここでもやはり、Craig Streetの功績は見逃せません。このことはCraig Streetのクレジットがない作品の質を知れば歴然とします。これらの他に、Craig Streetの「らしさ」を象徴する作品を紹介するとするならば、僕は間違いなく、Me'shell Ndegeochelloの‘bitter’を選(1999)びます。ベーシスト兼シンガーのMe'shell Ndegeochelloはアルバムごとに意匠が異なることで有名ですが、なかでも‘bitter’は一際異彩を放った名作です。他の作品との違いを一言で表すならば「内省性」と言えるでしょう。

憂いを秘めつつも、どこかハートウォーミングな音づくりは、Craig Streetの真骨頂。ダンス・ミュージックに身を委ねるのも、もちろんアリですが、たまには一人で、繊細かつ広大なアーバン・ブルースに浸るのも乙なものではないでしょうか。

come away with me

belly of the sun

bitter

